



「自然素材とオーダーメイドで男女が好むこんな家も
できるんだぞっていうポテンシャルを見せたかった」

時間を忘れさせてくれるプライベートテラス。



吹抜から見える天井は
木を全面に魅せたデザイン。



開放的な吹抜、1・2階の
サッシは木製のものを使用。



ロフトがつかなる子供部屋は
遊び心たっぷり。



奥さま専用の家事室兼パントリー。



男女が好む大人ナチュラルな空間。



ブラウンのタイルが
カッコいい2階洗面台。



俺だけの空間。旦那さまの書斎。



広々オーダーキッチンの
奥にはパントリーも完備。



緑をゆらすそ風が気持ちいい。
今日は読書の日でしょう。

HOME JOURNAL

My home story, with Taisei

俺
シリーズ
No.1

高知市旭北町 Model house No.1
竣工:2014年12月 設計担当:大崎 修一



「初めての展示場、名前を付けるなら「俺の三角屋根」かな(笑)」

閑静な住宅街に完成したのは、社長自らがプロデュースしたタイセイホーム第一弾のモデルハウス。「ウチの家でいうと、今まで“かわいい家”が多かった。でも自然素材を使ったオーダーメイドの家で、女性だけではなく男性からも好まれる家もできるんだぞ!っていうことを見せたかった」と語る大崎社長が手がけたのは、「俺の三角屋根」をテーマにした家。塗り壁、瓦屋根、無垢材、木製サッシ、鉄などをうまく組み合わせ、落ち着いたある大人ナチュラルな雰囲気にカッコいい要素をプラスしたつくりこにこだわった。

「家づくりのプロが見ても住みたいと思える家を…」

常設展示場(モデルハウス)は、4000万～5000万もの多額な経費がかかるうえ、5年後には取り壊すことになる。「お客さんの見積もりにもそんな経費を上乗せしたくないし、必要以上の経費は経営も圧迫する」と大崎社長。これまで「モデルハウスは持たない」と言い続けてきた。

ある時“移動型展示場”(建売式のモデルハウス。半年間の一般公開後、オーナーさまが実際に住まう家)を知り、「これならできる!」と本格的に動き出した。経費は最小限に抑えながら、「家づくりのプロが見ても住みたいと思える家を高知県の子育て世代のご家族に届けたい」と、通常50坪～60坪はあるモデルハウスを現実的な30坪程度の広さに。「大き過ぎる家を見ても、あまり参考にならない。土地も建物も現実的な広さのものを見るからこそ参考になる」というのが社長の持論だ。子育て世代のほとんどのご家族が購入する30坪台の広さで、どんな家をつくれるのか?そこが腕の見せ所になる。

「時間を忘れるぐらい、居心地のいい場所」

人は人生のほとんどを屋外より屋内で過ごすというデータがある。だからこそ室内環境が大事と言う。「高い安いという素材選びではなく、室内環境を第一に考えた素材選びをしたい」と大崎社長。調湿効果があり、CO₂やホルムアルデヒドを吸着してくれるしっくい塗りの塗り壁。断熱や防音、防カビ、防サビなどに優れたセルロースファイバー。天井にまで張られた天然木には、「フットレッチャ」や「ゆらぎ効果」が十分に期待できる、まさに健康住宅。

特に力を入れたのは、エクステリアや家族だけのプライベート外部空間。テラスでは植栽を施し、室内からでも緑々しい自然が感じられる。「家にいながら旅館やリゾート気分が味わえるように…」と考えた。屋根のあるテラスには洗面台が備えつけられ、正面にウッドフェンスをつくることで、外からの視線にも配慮。子どもたちのプールを出して遊んだり、愛犬の水浴びなどもできる。忙しい日常を忘れ、木々からのマイナスイオンが入った風にあたりながら読書をするもよし、さわやかな朝にはモーニングコーヒーがおいしく飲めそうだ。

室内には2箇所の吹き抜け、1・2階の至るところに間接照明で遊び心をプラス。キッチン奥には奥さまのための家事スペース、ロフトがつかなる子供室や、コンパクトな空間でもくわくするようなアイデアがたくさんあり、半年間にわたる「俺の三角屋根」の一般公開は大好評に終わった。

「まだまだ続く「俺シリーズ」に乞うご期待」

海外や国内を忙しく飛び回る大崎社長。時にはスタッフを連れて共に感性を磨く。デザインやアイデア、素材など、「いい!」と思ったものはすぐに持ち帰り、家づくりに活かしている。「高知県にない家をつくる」と、まだまだ成長過程のタイセイホームの今後が楽しみだ。

モデルハウス第一弾が建つ旭北町では、現在「俺の北欧」をテーマにした第二弾のモデルハウスを公開中。「男前デザイン」を意識しながらも、女性にも好まれる工夫が体感できる第二弾のモデルハウス。あと3回の公開を残し、これから家づくりを検討するご家族の参考になればと願う。

古くならば古くなるほどに味わいが増すのが、自然素材を使った家。30代で家建てたご夫婦が60代になっても、愛着を感じられ、似合う家になっていく。そんな、「ずっとこの家にいたい」と思える家こそが、家族の仲をより一層深める、という大崎社長の信念。これからも“本物の家”を追求し続けていく。